

永富独嘯庵（漫遊雜記）にみる神経症概念について

小曾戸 明子

神経症 *neurosis* という用語はスコットランドの医師 W・カレンにはじまるとされる。（一七八三年）。近年この命名は疾病分類から姿を消したが、日本の精神科臨床の現場では、その用語は実感を伴った多形単体としてなお機能している。日本の和洋折衷医学の伝統は、明治期に中断し、公的認知よりまだ十年に充たない。

江戸時代中期・一七六三年に永富独嘯庵によって著わされた木刻出版された『漫遊雜記』の中の「気疾」という用語が注目されるのは、単に使用頻度の多さのみでなく、この用語が江戸時代の古方派の到達峰ともいえる、「一氣留滯説」という単一疾病論の、鍵となる化石のような病（態）名用語と考えられるからである。そしてこの書が昭和十年代に、動物学者の黒田亮や医史学者の富士川游により高く評価・紹介されており、吾が国ではすぐれた医道の書とされているからである。

ここからだのつながり（気持）や、ひととひとのつながり（つきあい）を日本語では、気感を表わすことばを用いて対話することが多い。日常のなにげないあいさつでも天気にと託して、ありふれた身体感覚を共有しあい、確認しあって日々暮している。しかし不調の時には、からだの一部を異物化さ

せるごとく「氣」を主語にして、その違和感を訴え悩む。気がめいる、気がすまない、気が散る、気が狂いそうだ、など自己不在の *egoless* な表現になる。その異物化した氣の部分に、自己が投影され同一視され、さらにはその身体違和感覚に支配されて、逆の体験パターンになっていく。いわゆる分裂症の一部も含めた神経症の状態である。このころの病氣の状態を、氣の病いとその悪循環と言った方が当を得ていると思われるのはその為である。

『甘えの構造』（一九七一年・土居健郎）の中には「氣の概念」の一節があり、「氣の病い」と「氣ちがひ」の二つの概念について、「それぞれ元來欧米語の翻訳である神経症と精神病に相当する。しかもこれら翻訳語よりも、そしてまたもとの欧米語よりも、はるかによくこれら精神障害の本質をあらわしていると思われる。」とのべられている。

しかしながら日本語で「氣の病い」というと本当の病氣ではない、たいした病氣ではない、と軽んじられる傾向にあり、「氣のせい」で生じている病いは「詐病」と同類扱いはされかねない。これには機能性の病い *functional disease* に対しての偏見や否認の機制が働いているかのようだ。「目に見えぬものは言わぬ」という吉益東洞までさかのぼらなくても、実体がつかまらないものは、客観科学の対象からははずすという判断である。明治以降に移植した医学のワク組みには、氣の概念や用語が存在しなかったという事情もある。日本のこの百年のアカデミックな病名告知と、日常用語としての病名との

間の断絶は、すでに十八世紀古方派の中に芽ばえていた、気というもののへの認識にかかわるある本質的な態度・スタンスの差異にあるとも言えよう。

永富独嘯庵の『漫遊雜記』の中には永富自身の自験例が記され、自ら微毒を病んだことも記されている。「気疾」という用語も、そうした性感染症へのアプローチの中からつむぎ出された概念であると考えられる。

「気疾」という用語は、再刻本では11回用いられ、前半6回は総論、後の5回は症例中に記されている。「今世患_二微毒_一者、多兼_二氣疾_一、故処方亦不_レ兼_二療氣之藥_一、則毒氣凝而難_レ散。」「痿躄初発、其人無_二微毒暨瘀血之諸症_一而其心下痞鞭弦急者、多是氣疾也、須_下用_二吐方_上後長_中服瀉心之方_上。」蓋人多_二思慮_一火易動、火動則津液涸、加_レ旃恣_レ欲則因為_二虚勞_一、虚勞亦多_二氣疾_一。」これらは総論の前半3回の引用である。気疾という用語が、微毒、瘀血、虚勞、痿躄などの用語と並び置かれ、兼ねるといふ言い方で鑑別しつつ複合病態を診て治療に当たっていることが示されている。

「一男子患_二氣疾_一、左右脈洪數、心下痞堅、大便秘結、寤寐不安、語言失_レ理、称_レ王称_レ帝、余以_三聖散_一、吐_レ之_二二回_一、与_三參連白虎湯_一三十余日而全愈。」初版、再刻本ともに筆頭にあり、ある症例であり、気疾の三徴候が身体所見と精神所見それぞれ簡明に記されている。「有_二一婦人_一、日言、我面今日、加_レ長數寸、我面今日加_レ短數寸、蓋得_三之_一其性多_レ妬、其夫多情、常懷_二鬱悶_一也、長_二服_三黃湯_一而愈、諸氣疾、作_二恠状_一者、大

概皆如_レ此。」この症例の註解の中で富士川游は、「気疾と称するものは専ら情志の滯うるに因りて現わるところの諸症にして、内の方、……の七情に傷られて……今で言えば主に……神経症を概称し、時には癩癩の一症をも気疾の中に入れ、或は精神病の部類に属して、しかも外から見ても癩癩と称すべきほどの症をも気疾の中に算せしものかと思われる。」と把握して述べている。

文献

- (1) 永富独嘯庵『漫遊雜記』好古堂、明和元年
- (2) 『漫遊雜記叢語』積玉圃、文化六年再刻、『近世漢方医学書集成14』名著出版、一九七九年
- (3) 富士川游『譯解漫遊雜記』中山文化研究所、昭和十五年
- (4) 富士川英郎編『富士川游著作集第六卷』思文閣出版、一九八一年
- (5) 土居健郎『甘えの構造』弘文堂、一九七一年

(平成七年三月例会)

箕作阮甫『産科簡明』と原著者及び原著について

石原 力

幕末の代表的蘭学者として箕作阮甫(一七九九—一八六三)はあまりにも有名であるが、その数ある訳書の中で『産科簡明』は刊行されず、写本もまれて『幻の書』(玉木存)といわ